日曜

一

208

月

沼波瓊音

○雪月花と昔からいふ。どれも廣い趣味のある事である。そしてどれも白いのは、雪月花に優劣を落おうは誤りであらう、併し好き嫌ひを人に問ふては生来る。その人の性格を推すもおもしろい。いつか博文館で小説作典りか辞書とかいふものを編しん時、弘く筆執る者に、雪月花のいづれを好むかを問ひ、其のなむ者を、雪

ケイオン

りか月ろか一字ごとまかせ、其の筆跡を写生にして、極西ぶりにしたものがあった。私はその時「月」と書いた。今でも三者其の一を選べと云はるゝなら、立ちに月と答へる。月を仰む人は、蓋し私が親友であらう。静で、輝いて、沈んで、遥んでいで、愛感高調に達すれば必ず涙を見る、この趣をしみじみ味ふのである。

○月はいつも佳い。併し月をしみじみ好む者は秋の月を望む。習慣に捕はれて

ケイオン

るのでも何でも無い。事実月の趣は心に入るのは秋であるからである。月そのものの以外、空気、雲、虫の音、其他すべて（稍寒き）の物がこの季に於て月の趣を助（雲の姿、けるからである。陶淵明が四時の代表的詩趣を列陳して、春水満四澤、夏雲多奇峰、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松と云つた。後は短いが、強い力がある。春に花を忘れ、冬に雪を飽みめのも簡単が輝いて居て面白い。進がよんで

# 徳



いつも乃公は斯う思ふと云ふ所がある。
そうして何にもよく各季の特色を捕へて
居る。ばつとしてゐる。やうで而も具体的で
ある。秋はやはり月光を採つた。
○清少納言は枕の草紙の書き始めに、こ
れに似た書きぶりで四時の趣をのべた。
そこには秋に月を書かず、却て夏に月を
書いた。これも面白い。
○佐藤一齋と云ふ人は自然を見る眼を具へ
て居た。曰く、月を看る法は清素を観る法

ケイオン

り、圓缺晴翳の間に在らずと。又曰く、人の月を看るは皆徒らに看るあり、徐らに宇宙無窮の概を想ふべしと。まことに月の趣は清雅の感にあるべし。月を口実として、然らずしてこれを物に託して、酒飲みに勸る者は慨れむべき哉。勸われて月は見るべからず。酒飲む、しかりと雖も月下に飲むべし。月下に不可ならず、唯しみじみと可し、唯しみじみと語るべし。

ケイオン

六

一字アケ

○明月や家賃の外の坪の内　野坡

稍傍らしく間えるが、動ゝ云ふの起る所がある。友達は追々家を建てる、地所を買ふ。私はいつまでも借家に住んでゐる。自分に家を建てるのは、動物から植物に退歩するのだ、まだ〳〵放言したりもある。蕾を緑葉を作らせた。月の好い晩、庭にこの可哀さ、緑葉を抱いて、其の上に坐りこんで観た。自分で建つたものの上に月を置いてゐる、と云詩りが動

ケイオン

# てつ

七

いん。独りで可笑しくて堪らなかった。
この線香花火をつくに打ちて、風鈴の焚き
ねに[illegible]て仕舞ふた。

この時の淚ではこの句は
喜ぶか、何ともく趣の
似通ってるやうに思ふ。

キウ子子ゲ

名月や果てはせたまき友を泣く　東皐
月の照の極在淚である。何ゝは知らず流
れそうつる淚である。自然の淚である、絶
對の淚である。しかも人は純に人である

ケイオン

きう一生涯

きう一生涯

注意すべき理由が自ら浮んで来る。これは假託である。

用ひられたまいか

花にまき友は假託である

名月や忘るゝ頃を今の吹く　成美

刀の柄忘るゝはあり握りつめ、の忘るゝ

である。静極つて動僅に來る。

明月や八重山吹のかゝり花　一茶

菅笠で炎天や八重山吹の狂ひ咲」の句を成す。実景なり。

あとにてこの句を発見す

男ふ、山吹の色といい、其の八重なる

ケイオン

複雑なる形をしたる、明月下のシルエット。

天下の月の勝りたるかな。

て曰く、そんなに理屈云はねッていいらぢやねエか、俺は[illegible]、[illegible]云処見たで、[illegible]

うゝいつたゞけさ。

名月の光無ければや檍の葉　寥松

卵の形笑頭、面度く、平滑にして光澤ある檍の葉が、銀の如く輝いて居るのは、

慧に月下の庭の一風趣である。無

ケイオ

[illegible]

もとより詩人であるべきである。檜はよく庭にあるべし。しかもあまり重んぜられず。こゝに大枝小枝あり。こゝに木を屏風に描いたのは頗る珍である。

○必ずしも事の大小を問はず、事業を成すに、必ずしも其処に犠牲あり。或は不識の他人、或は朋友、或は妻子、或は親、或は我の一部、或は全部。或は真の総て。嗚呼日光の下、燈火の下には之を含ふの虚無あり。犠牲を奈何にすべき。この犠牲を奈何にすべき。

（涙を含ふ）

（私は檜の美を写したのは大観が始めと思つたら、角にこんなのがあつた。）

○うき人を養めては謗る朕の蔵　尚白

大勢寄って遊ぶたはれ女　奇香

連句の一部を抽出すると連句の本意には背く。併し二句の間に纏まりつて居る情景は、独立して味ふも、不可なるの日

（ケイオン）

殊に無いさせ。白い顔が月下に動く。しどけなき裝容。白粉の香ひ。嬌音、艶なる声々。養めては謗るごに其語を聴く

如き思がある。

○「のやうにて恢心を互に慰め給ふ程に三

（必ずしも性質にあらずして）

（軽快な言葉）

年ばかりありて春の和めるように、流耶姫月の
あそこうつ出でたるを見て常よりも物思
いたるさまなり、伴取物語の物がたりはこれ
より始まる。春の和めるように、やがても
月、はや八月、あぐや姫の悲歎は漸次然
しくなりて来る。終に昇天の十五夜来
の月は照りわたる。天の宮めたる事。翁
姫の血の涙し、帝王の威力も之を動かす
を能はず。髪上や裳著や、火鼠の皮衣
仏の石の鉢、燕の子安貝、帝の迫りたる

変、一切を忘れ、かぐや姫昇るべき天に昇る。嗚呼孫る者亦一切を忘れずして

われ古らめ（人は泡えず「あるし他態」に執着する。（人はそれが生まれ。）右にあり

し物左に移れば泣く。左にありし物右に移れば泣く。而うして利るべき時来れば

物必ず移る。独り田舎の取扱張の如き

~~まれ十木詩と申すべき小生流れに近~~

~~世取は小説にあらずして事実である。佐~~

々木氏の歌に曰く「かぐや姫かぐる夜は

や昇りけむ澄みわたりたる月の影哉。

○むら雨に市のかり屋をふき取て　曾良

町の軒行く川音の月　芭蕉

此句を吟じて曾根の庄の町を思ふ

の樹陰寂きたる眉濃き女を思ふ。

○水のもに照る月みを割ふれば今宵　淑順

秋の最中なりける

描く所の景豊富なりとはいふべし、

所の思想深遠なりとはいふ。徐ろに之

を朗吟する時、其の韻節に自ら月光

十五

の濁りあり、其の韻節を通して順が見たる儘の景の居々ねが眼前に展ぐらるゝを

ちぶより。歌の味ひは愛に在り。

○

夜半の雨後

名月や雨をあけて飛んで出る　鬼貫

飛んで出る、飛んで出る。鬼貫に非ずんば飛ばんで出でざるべし。鬼貫に非ずんば飛んで出でるとは云はざるべし。

本月や北国日和定めなき　芭蕉

名月の花かと見えて綿畑　芭蕉

名月に霧や田の雲り　今

古今名月の吟のうち私の最も好むはこの二句である。沉んだ中の華やかさ興、朦朧たる中の明かさ感、冷かさうるおいに、加何の詩を以てこの句の如く暖き黄色、加何を説くべき。

○「かすかに資産を望む人のあらば断然こと切りたしされば静みに以外に楽しむを決して求めず金尽冷やかに明星清き野の曙は木の葉ちり谷川細きあたりまど旅こそ

ケイオン

十七

わが一生の苦みを尽くせめて云へば動る手紙をまきし夜の月明を今も忘る能はずと友の語りぬ。　芭蕉

○いよ〳〵と猶露けしや女郎花　芭蕉

蔦葛買ひに行く朝の月　今ほと

この砧へられぬ果敢なき、而へられぬ細さ。芭蕉の泣きた共男は動る処であった。

朝霧たゝむ社着の芦田鶴　杉風

揚屋より月は雲井に帰らず　芭蕉

ケイオン

面白き日を忘れたもの哉。凡そ俳句は
[illegible]女を目に見えた所已には俳句で無い
が、その叙法に芭蕉独特の味がある。從
はれが何ある[illegible]縄堀の物を叙する時にも、
寂を忘れぬ。寂なる物の華やかなる物
芭蕉の特色が隠く顕はれて来る。

（部）

○宣長曰く、歌ははかなく詠む物と知り
て、其の外は何の習ひ伝へたる事も無し
と。詠むは主の動作である。この語の先

ケイオン

十

十一

意は、詩人はは[illegible]べし、[illegible]を
である。はあまき感で、詩人はこれを常
に有つて居[illegible]させない。月を好む人は
誘もこの感でをれば有つて居る人であら
う。

○月といへば、行燈と洋燈しか用ひぬ
つた時代の郷里の夜を思ひ出す。月の
光は男ふさまさ清く男ふさま淫みわたつて
居た。私の窓は向ふの[illegible]葉ふ[illegible]分に在つ
たが、窓々の燈（市内の暗い）は決して月の光

ケイオン

を妨げるものがなかった。（私はその頃大除柵に寄りかかって、イイオン）

割しんぶん東側の窓々の影を見詰めながら、「思しんで居た」を今も記憶して居る。

何をどうかえらい騒擾にありたい、

とかに望んで居たもの。騒擾がたちまち一人で数百人の心を思ふ。彼に動かす、それが

み彼心に信大に見えた。騒しくて騒らは

あったのである。今も望之しき騒よりに

行って朋明に遇ふ時、又が幼時の月夜を

思い出すして、云い難き心持にある。現

なる郷里は私の記憶中にあるものとは些の似たる所も無い。

○高等小学に行ってた頃、幻境今の俺し

かあった。夕方に降り出した雪雨が来て、其

為帰って仕舞った。私「驟」等二十人は

（此処らしくて、）（大抵）して来たのに、

どは掛角ずみに帰るとそこらは、どうして

今程見まいで帰った。（はぶれ屋）に居てる（茂徳）

もあれあった。

教室の縁に腰かけて泣きさうにな

ケイオン

廿二

て居た。雨は頓て止んで八時頃には星
美しい頭上にあった。私等はまだ
磨き上げたやうな　居た。先生達が可哀想
だと云って、その六人程を相手に幻燈を
始めて下すった。私等の席は玄関の入口
の石段の上に並べた腰掛で、広い運動場を
背にして居た。秋の夜はうすら寒かった
。幻燈はたまらなく面白い。時々振
反ると濡った運動場の土は月に輝いて

海のやうに見えた。大阪造幣局の景が映つた。煙突の根に黄ばんだ月が昇つて居て、真黒な局の前の何やら云ふに砕けて居る。先生がこの説明をしてあとに、こゝに照つてゐる（暗緑の）まゝの月と、どうまゝの本当の月と、どちらが美しいでせうかと云はれた。この言葉をどうもものか今も判然と記憶して居る。

○也前の住んでゐた前津、その辺へ父に連せ

請人でよくお月見に連れてつてもらつた。
ごたごたした市中を離れて、露に沈んだ屋
根、田圃に出て、月の光を思ひふさまる時、
踏りたい淫靡しめつた。父は川亭に
上つてわしづつ酒を飲み、義句（ケイオン）
詩を作つた。中ずまそこを出て帰り
途、或時生命が赤に光る象を見た。近寄
ると鉄鋼屋であつた。田中の一
軒家で、今にも崩れさうな月の光の中に、こゝのみ熟
烈な光を放つて、中に動く人影が赤く黒

く見えた。「油絵のやうだなあ」と父が云つた。

○名月や人を抱く手を膝頭　其角

人はもとより女ふこゝろ　この情の手を

涅槃に膝に置きて、暫く自然に黙す。高浜

放、其人を見るかき句である。

名月や先づ盃取りて莫迦喰ぐ　岱雪

この喰ぐと云語が強い。湯桂に物憂く蒼

蒼の上の月。

名月や柳の枝を空へ吹く　仝

ケイオン

限りなく細し。神韻の境に入れり。

名月や老を集りて高笑ひ　蕉三

あゝ暫く今宵の月に手向ふ事　大江丸

あけすけに手を[illegible]ふ今宵も　禁おるるく共

に面白し。

○月夜よし河の音清しいざ爰に行くも行

かぬも旅びてゆかふ　大伴四綱

大伴旅人帰が集人徳の将軍にまうて元

嶺に[illegible]いた。功成つて天平二年大納言に

任ぜられ京に帰ることにまうた。官人等こ

ケイオン

向こうに見える事を二つ書くしたのだ

れを筑前の蘆城の駅に送る。其の時防人佑の四麻呂が詠んだ歌である。実に素朴の人情の詠んだ歌である。この外別離の悲しみを詠んだ歌も伸びやかである。回顧独りは悲しみを賜はれば、そは其の日の情景を歌った。快く寛ぎたゝしてしかも深い情を含んでゐる。

○「その十三日の夜の月いみじく隈なく あかきに皆人寝たる夜半ばかりに縁に

ケイオン

あでなる人空をつくづくとながめて只今ゆくへ知らぬ身なれば思ふべきと思ふにまた生怖しく思つる事ども色を見て異事にいとゝ笑ひよどゝ聞けばこれは西行の一節なり。此湯無窮の底に妹を歌ひたるのである。これと読む所に妹は淵の底に沈む栗をもとめる。月の瓶はとゝもすれば異怖に達する。秋色の名月や手底きたらば何ともせじの句も

これのあるかのみで哭く、まま怖しさを

乞食人でなるらしい。

○十六夜や海老煮る程の宵の闇　芭蕉

蕉翁晩年の吟である。十六夜は一寸間音の間である。

○俳人十六夜の句を作るに十中八九は之に味のみ立つて趣向し一寸の間音の間である。甚だ物足りぬ。真の事の外に十六夜の色は無いであらうか。

十六夜は吟の効き夜ふりけり　道彦

ケイオン